

## 学社連携・ 協働フォーラム 報告

## 地域・学校・家庭の「思い」や 「目標」・「ビジョン」を共有しよう！

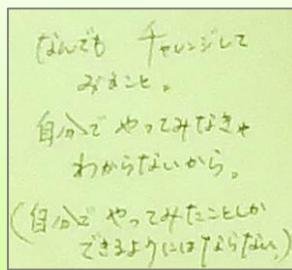
平成 30 年 12 月 1 日（土）長野県総合教育センターを会場に約 280 名の参加を得て、盛会のうちに学社連携・協働フォーラムを終えることができました。「学校を核とした地域コミュニティをめざして」をテーマに、講演会およびグループワークを通して、地域・学校・家庭が協働して、子どもを育てるために何ができるかを考え合いました。



講演会では、文部科学省総合教育政策局 地域学習推進課 地域学校協働活動推進室 コミュニティ・スクール推進係長の相田 康弘さんをお迎えし、「地域とともにある学校づくり」に向けて、「地域よし」「学校よし」「子どもよし」をキーワードに、コミュニティスクールを推進していく上でのポイントをご示唆いただきました。

### ◇地域・学校・家庭で「思い」の共有を！

→地域ぐるみで子どもを育てるためには、それぞれの思い（「こんな子どもに育ってほしい」「こうなってほしい」）を共有し合うことが重要。それぞれが膝をつき合わせて、意見を交わす関係に！



→参加者の皆さんで、それぞれの「思い」の共有を体験してみました。

#### ＜参加者の声＞

沢山の願いが出されましたが、共通していることも多く、「思い」を共有することの大切さを改めて感じました。

### ◇目標・ビジョンの共有を！

→関係者が意見やアイデアを出し合い、「目的や目標を共有」し、みんなで方向性を決めることが重要。そのために、「熟議」を重ねていきたい。

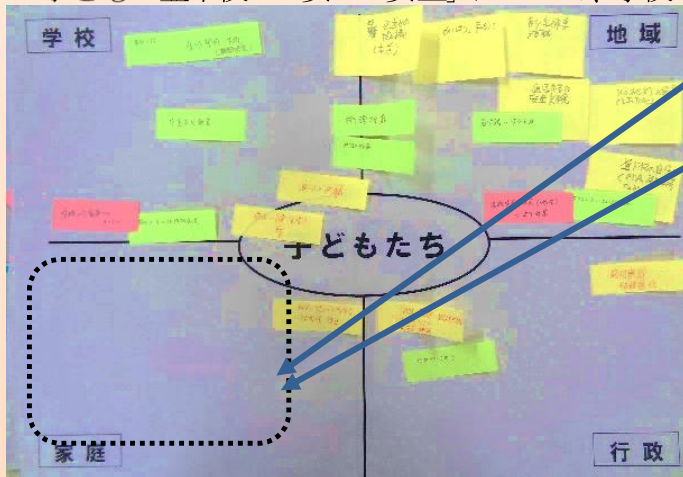
#### 参加者の感想から

- ・「目の前の課題と未来の目標が共有されていないと負担感だけが増える」という点が腑に落ちました。学校と地域が双方向の関係になるCSにしていきたいと思います。
- ・今まで地域の方と話し合う機会は幾度とありました。しかし、目標やビジョンを共有していたかというところ…。それぞれのベクトルが同じ方向に向かうようにやっていこうと思います。



◇目標・ビジョンを共有する前に情報は共有できているか？

子どもの登下校の「安心・安全」について、学校・家庭・地域・行政は何を行っているか考えました。



あれ？家庭のところが空いているね。

家庭でも「今日〇時に帰る」という確認・通勤時子どもと一緒に歩くなどしているね。企業が防犯ブザーを提供していたなんて知らなかった！

参会者の感想から

様々な意見、考え、見方があり、おもしろかったです。互いに知ること、共有することができたと思います。どのような社会になっても、人とのつながりはなくならないので、そこを大切にしていくことに気づきました。

付箋の色や貼られている場所が偏っていると、情報が共有されていないということになる。情報が共有されると、見落としがなくなる。安心・安全については見落としゼロで！

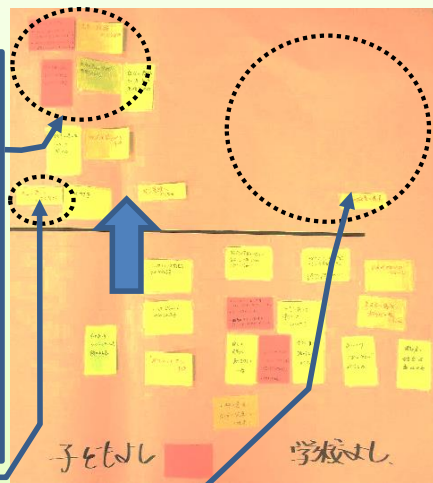
→複雑化・多様化している世の中だからこそ、「思い」を伝え合い共有しよう！

◇〈地域よし、学校よし、子どもよし〉～持続可能な仕組みづくりに向けてのグループワーク～

- ①「地域よし」「学校よし」「子どもよし」を考える付箋を模造紙の下半分に貼って共有する。
- ②下半分に貼った付箋は、30年後も「よし」と言えるものであるか。予測不可能な30年後を捉えたとき、何を評価項目にしていけばよいか。評価項目になりそうなものを3つ以上付箋に書く。
- ③評価項目を貼りながら、30年後も必要なものを模造紙の上に動かす。

あるグループで話題になった30年後も必要なこと

- ・「子どもよし」について、あいさつができる、自分の意見が言える子どもかな。
- ・それらは今も30年後も同じだね！
- ・それだけでなく、判断力や決断力、人を思いやる心も大事だと思う。
- ・これって、AIができないことだね。



- ・AIに負けない子どもになってほしい。学校も、AIにできないことを育む学校であってほしい。

- ・「学校よし」については、やっぱり学力だよ。今も30年後もそれは変わらない。そのためには昔の教育に戻して、知識をしっかり覚えられるようにする学校かな。
- ・でも…、30年後はAIの時代。それに、答えのない課題に対して、よりよい方向を決定していく力が必要。
- ・昔も今も、そして30年後も変わらず大事なことはありそうだけれど、よく分からない。(上へ貼れない)
- ・子どもたちにどんな力をつければよいのか考えなければならぬ時かもね。

参会者の感想から（学校関係者）

立場の異なる方から寄せられた意見は、新鮮なものでした。学校は何を求められているのか、どんな場であるべきなのか、考える時期にきているのかもしれないと強く感じました。

膝をつき合わせて話し合うからこそ、課題・目標・ビジョンが共有できる！ 思いを共有して、すべての人々の明日の「笑顔」をつくっていきましょう！





【塩尻市辰野町組合立両小野中学校】金森 晴彦 先生 (生徒会主任)

## 自らの思いを伝え合い、合意形成を図る力を育てたい

### 夢プロジェクト生徒会「ふるさとコンサート」(全学年)

生徒会活動では、学校生活をよりよくする活動に取り組んでいくことが大切です。そこで金森先生は、「地域貢献」を意識した活動にも関心を持って取り組む姿を目指し、生徒の気持ちに寄り添いながら地域貢献活動「夢プロジェクト」を具体的な形にしていく単元を構想しました。



対話的な学び ふるさとコンサートのよさや価値について、異学年合同のグループで話し合う

対話的な学び



(Tさん)コンサート  
のよさは、  
やってみなければ  
分からない...

(司会)コンサートの  
よさにはどんなこと  
があるのかな?

6月下旬

9月に行う「夢プロジェクト」は、地域の方を招待する「ふるさとコンサート」を行うことになりました。そのコンサートを行うことでどのような可能性が生まれ、どんなよさを感じられるかを話し合いました。自分たちの手で新たな企画を創り出せる喜びを感じていたTさんでしたが、その一方で自らが主催するコンサートを経験したことがないため、「ふるさとコンサート」のよさや価値について語れないでいました。

異学年合同のグループを編成し話し合うことで、個の価値観や思いの違いが見えてきます。その様子を教師がしっかり把握し、次の話し合いに生かしていこうとすることが大切です。

子ども理解

深い学び 地域の方の顔を思い浮かべて、コンサートの最後に会場全員で歌う曲について考える

深い学び



(Tさん)来てくださった方が  
涙ぐんでいる姿や、後日  
「とてもよかった」と感想  
をくれた人もいました。

9月上旬

「ふるさとコンサート」まで1ヶ月と迫った日。コンサートの最後の曲を決める場面で、唱歌「ふるさと」と嵐の「ふるさと」のどちらを歌うかまで意見が絞られてきました。金森先生は司会者にTさんの指名を促します。指名されたTさんは、吹奏楽部での地域での演奏経験を語り始めます。この発言に、生徒たちの心は揺さぶられ、唱歌「ふるさと」がコンサートの最後に歌う曲としてふさわしいと感じられるようになりました。

生徒の意識を的確に把握した教師が、明確な意図をもった指名をすることは、生徒会としての合意形成を図るための生徒の考えを深めることにつながります。

指導研究

主体的な学び 自分たちの手で創りあげたコンサートを通して、地域貢献できた喜びを自覚する

主体的な学び



9月下旬

「ふるさとコンサート」当日。会場に集まった全員で唱歌「ふるさと」の大合唱を行います。吹奏楽の演奏に合わせて歌ったこの曲は、会場に集まった人々の心が一つとなった大合唱となりました。コンサート終了後Tさんは、「体育館いっぱい声が響いているのを肌で感じ、演奏をしてとても楽しかったです。『地域との一体感』を叶えるという目的を達成できて嬉しかったです」と地域貢献できた喜びを自覚していました。

私たちに何ができるのかということ、実際に体験したことを根拠としながら合意形成に向かっていく話し合いを重ね、主体的に実践することが、地域貢献できた喜びにつながりました。

素材研究

Tさん自身が体験したことを自分の言葉で仲間に語ることで、集団としての合意形成が図れたよ。金森先生の「子どもを真ん中にした教材研究」により、めりはりを付けた単元展開となり、地域との一体感を感じることに繋がったんだね。



子ども理解

素材研究

指導研究

素材研究

指導研究

素材研究

指導研究

素材研究

指導研究

素材研究

指導研究

素材研究

指導研究

素材研究

指導研究

素材研究

指導研究

素材研究

指導研究

素材研究

指導研究

# 「一帯一学」への扉【特別支援編】

～資質・能力の育成に向けた授業づくり～



[松本市立鎌田小学校]  
特別支援学級担任の  
先生方



「まなびの時間」(自立活動) **一人一人に応じた自立活動の指導を充実させたい。**

特別支援学級の教育課程には、障がいによる学習上または生活上の困難を主体的に改善・克服するために必要な知識、技能、態度及び習慣を養う「自立活動」が位置づいています。鎌田小学校の特別支援学級では、友だちと関わりながら一人一人の教育課題や自立活動の目標に応じた学習が継続して行えるよう、特別支援学級担任全員で指導方法を工夫しました。

指導  
研究

朝の時間 (8:20~8:35) に自立活動を位置づけ、グループを編成する



自立活動を授業中に行うと教科学習の時間が減ったり、継続して参加できない子どもがいたりすることから、在籍児童全員が集まれる朝の時間(月に2~3回)に位置づけることにしました。担任全員で一人一人の自立活動の目標や人間関係を基にしながら学年や学級の枠を外したグループを作り、子どもが楽しみながら学べる活動を考えました。

自立活動の目標は、個別に設定されています。教育課題を基に、この学習でねらいを達成している姿はどんな姿か、子どもが持っている力を発揮できる集団かを複数の教員で検討することで、活動内容や支援が明確になります。

子ども  
理解

主体的  
な学び

自立活動の目標に応じたためあてを設定してからゲームを楽しむ



あるグループは低学年と高学年でペアを作り、低学年からカードをめくって同じ動物が出たらカードがもらえる「動物集めゲーム」をしました。“人との関わり”や“見通しのもちにくさ”が課題のAさんは「はやくやろう」と意欲的ですが、まず教師は『順番を守る』『友だちの話を聞く』とめあてを確認してから始めました。すると高学年のAさんは、低学年のペアがめくる前に手が出るのをグッとこらえました。順番通りカードをめくってカードがそろったとき、ペアから「ありがとう」と言われると、小さく「うん」と頷いて最後まで参加しました。

同じゲームを行う場合でも自立活動のねらいに基づいたためあてを設定し、活動の最初にグループ全員で確認することで、友だちと楽しみたいと願っている子どもは、どうすればよいか思考し、行動することができます。

素材  
研究

対話的  
な学び

めあての達成を語り合って、取組のよさを実感する

振り返りで、自分や友だちのよさを発表しました。Aさんのペアが「Aさんと一緒にやって、動物がそろってよかった」と発言した後、教師が「Aさんが、ちゃんと順番を守ったからね」と付け加えました。離れた場所で聞いていたAさんは、友だちの方に体を向けて座り直し、笑顔を見せました。



めあてに基づいて取組の様子を自分の言葉で語ったり、友だちや先生から称賛されたりすることで、行動を振り返るとともに自分の取組を肯定的にとらえることができ、意欲の高まりや一般化につながります。



自立活動は、各教科等で育まれる資質・能力を支える役割を担っています。「子どもを真ん中にした教材研究」で子どもが思考・判断・表現する力を高め、達成感・成就感が十分味わえる活動を工夫しましょう。

